

種豚改良増殖管理技術試験

丸山 健^{*1}・吉田繁樹・真原隆治^{*2}・相馬由和

要 約

現在、肥育豚の生産方式で主となっているものは、LWDの三元交雑によるものである。このなかでランドレース種はF1種豚の生産上重要であり、高い繁殖能力、発育能力、優良な資質が求められる。

優良なランドレース種豚を作出し、県内養豚農家に種豚の配布及び精液の譲渡を行うとともに配布先農家の成績情報を得ることにより広域的な改良増殖を図る。

平成12年度は28腹の分娩で子豚285頭を生産した。23頭の種豚を払い下げし、8頭分の精液を払い下げた。

キーワード：ランドレース，改良増殖

緒 言

我が国に最初にランドレース種が導入されたのは昭和35～36年である。まだ大型品種が普及していなかった当時は飼養管理の難しさや繁殖障害が多く出るなどの理由で敬遠されることもあったが、品種への理解や高い産肉成績により、急激に増加し、飼養形態が中型種から大型種へ移行するさきがけとなった。その後、改良が進み日本に定着したランドレース種は三元交雑の基礎となる種雌豚として広く用いられるようになった。昭和50年代以降はデュロック種が止め雄として普及し、現在でもLWDの三元交雑が肉豚全体の8割近くを占めている。

三元交雑におけるランドレース種の役割はF1母豚生産であり、基礎となる部分である。そのため、高い繁殖能力、産子の発育能力、強健性を子供に伝えなければならない。

高い能力のランドレース種を増殖させることは、経営の向上に間接的ではあるが幅広く影響を与えると考えられる。

当試験は外部から優良な種豚・精液を導入してさらに優れた種豚を作出し、それを県内農家に導入してもらうことにより、広域的な改良効果を生み出すことを目的とする。

※1 現 茨城県農業総合センターつくば地域農業改良普及センター

※2 現 茨城県県北家畜保健衛生所

材料および方法

基礎となる種豚は以前から当所で飼養していた種豚と平成11年度に外部より導入されたランドレース種。

基本計画では、図1に示したとおり常時、種雌豚28頭、種雄豚4頭を飼養し、これら及び輸入精液を用いて繁殖を行う。

同一交配組合せ最初の産次で1腹当たり概ね雌雄各1頭の育成豚を選抜し、その中で優良なものを更新豚とする。また、次の産次で生産されたもののうち優秀な育成豚を農家への払下豚とする。その他、毎年、輸入精液の導入、外部より繁殖豚を導入する。

育成豚については、自家検定を実施して成績の検討をおこなう。育成豚の選抜にあたっては、検定成績及び体型や肢蹄の状況等を考慮して行う。

育成豚の払い下げは、7～8ヶ月齢でおこない、精液の払い下げは、通年実施する。

結 果

平成12年度は、28腹分娩し285頭の子豚を生産した。離乳子豚数は258頭で育成率は90.5%であった。

雄6頭、雌19頭の25頭の産肉能力検定を行った。

産肉能力検定は直接検定で行い、雄は5頭が不合格、1頭が検定中止、雌では6頭が合格、12頭が不合格、2頭が検定中止となった。

1日平均増体重では、雄の平均993g、雌の平均895gと比較的高い能力を示したが、ロース断面積は、雄の平均22.0cm²、雌の平均26.5cm²と成績が悪く、不合格となるものが多かった。

育成豚の払い下げは、県内の農家9戸に対し、雌21頭、雄2頭の計23頭行なった。精液の払い下げは農家2戸に対し、8頭分行なった。

引用文献

- 1) 日本の養豚 編集部 (2000) 本誌に見る養豚50年の歩み 日本の養豚2000年1月号

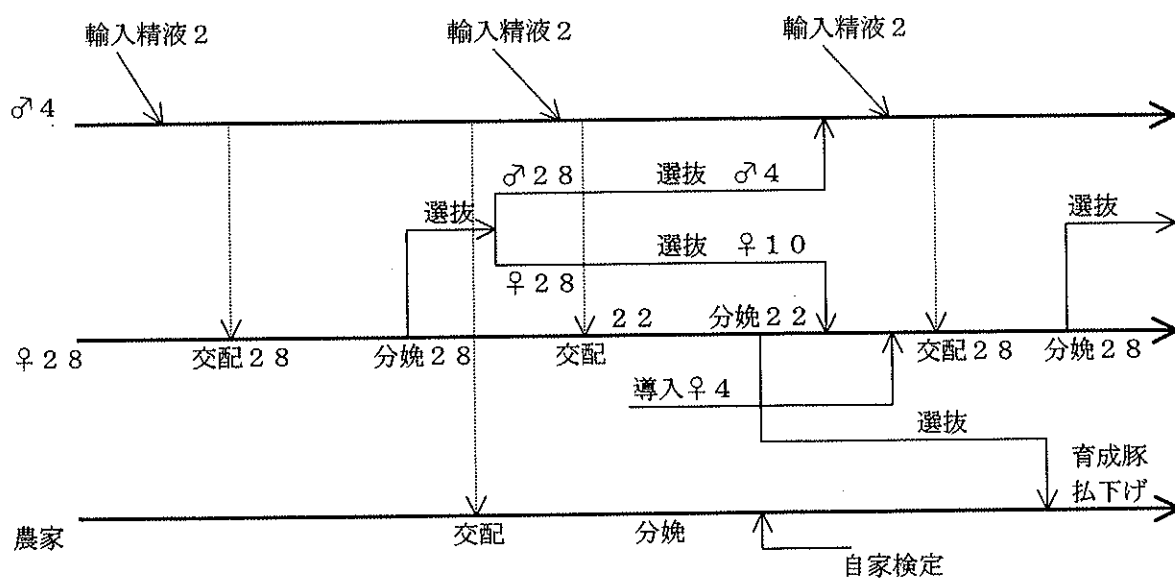


図1 基本計画

表1 産肉能力成績

項目	検定豚 (雄)	検定豚 (雌)
検定頭数 (検定終了豚)	5	18
飼料要求率	2.93±0.48	3.26±0.42
1日平均増体重 (g)	993±117.5	845.2±124.7
ロース断面積 (cm ²)	21.96±2.06	25.06±4.56
背脂肪層の厚さ (cm)	1.86±0.46	1.79±0.44

表2 繁殖成績

分娩腹数	分娩頭数	生産子豚数	離乳子豚数	育成率
腹	頭	頭	頭	%
28	312	285	258	90.5